

本日の学び テーマ：「飼葉桶から始まる平和」テキスト：ルカ2章1-20節

【理解の手がかりとして】

ヨセフとマリアは、時のローマ政府の命令により人口調査の登録をするためにダビデの町「ベツレヘム」へ向かっていった。世の救い主が「飼葉桶」の中にお生まれになった、それは羊飼いたちのように、社会の片隅に追いやられていた小さい立場の者たちがまず出会えるため、その貧しいところに来て下さった、・・・このことはクリスマスの真実だと思う。そしてそのメッセージから大いなる慰めを私たちはいただく。

しかしなぜ救い主が「飼葉桶」という場所でお生まれにならねばならなかったのか、理由ははっきりしている。「宿屋には彼らの泊まる場所がなかった」(2:7) からである。「泊まる場所がなかった」・・・これはこの世にお出でになった救い主を世が受け入れなかった、ということを表わしている。

ヨハネによる福音書 1 章にこうある「暗闇は光を理解しなかった」(ヨハネ 1:5) と。またイエス様ご自身も次のように言われたことがある。「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない」(マタイ 8:20) と。理解されない「光(イエス様)」。枕する所ない「人の子(イエス様)」。それは、イエス様の人生を貫いてそうだった。そしてその極まったのが「十字架」である。

だから、この飼葉桶に寝かせられたイエス様を思うとき、私たちはその十字架に向かい行かれるイエス様の生涯のはじまりを思わずにはいられないし、その世界に「泊まる場所がなかった」ということを痛みを持って受けとめること、そのことが大切なのではないかと思う。

先ほど「世の救い主が飼葉桶の中にお生まれになった、・・・それは羊飼いたちのように、社会の片隅に追いやられていた小さい立場の者たちがまず出会えるため」と述べた。「羊飼い」という職業は、もともと遊牧民であったイスラエル民にとって欠かせない尊ばれる職業だったのだが、やがてイスラエル民が定住化し、都市化するにしたがって、だんだんと町の外に、社会の周辺に追いやられる仕事になっていったと言われる。

彼らは周りから指さされて言われていただろう。「安息日を守れない、手がいつも汚れている罪深い奴らだ!」と。そうして軽蔑され、差別され、交わりの外側に置かれていた人々だった。しかしそんな彼らを、神様は第一の客人として招かれた。有力者ではなく、地位のある人でなく、皆から避けられ小さくされている人々を招かれたのである。

この羊飼いたちは、神殿にささげる「贖罪用の羊」を飼っていた者たちだったのではないか、という考察がある。羊は羊毛や食用の目的のため飼育される。しかしもう一つ「贖罪用」という目的があった。歴史的にもベツレヘム郊外には、神殿用の羊を飼育する羊飼いたちが住んでいた、ということが分かっているそう。

旧約聖書の律法には、人間が犯した罪を贖うために動物犠牲(牛や山羊、羊など)をささげる、という定めがある。ここに登場する羊飼いたちは、その神殿にささげる犠牲の羊を

世話していた者たちだったという可能性は大きいと思われる。そしてその事を知った時、私は、なぜイエス・キリストの誕生の知らせが、まず「羊飼ひ」たちにもたらされたか、良く分かる思いがする。

彼らは人間の罪の愚かさを、そしてそれが決して動物犠牲では贖いしつくせないものであることを、実生活の中で痛感していたことだろう。彼らは「夜通し」(2:8) 羊の群れの番をしなくてはならなかった。それはそのまま、人間の罪が繰り返されている現実、贖いを必要としている現実を表しているのではないか。

であるから、「羊飼ひ」が、まことの贖いの羊となられるイエス・キリストの誕生の証人となったということ、これは本当に相応しいことだと思う。パウロは言う。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。」(ローマ 3:23-25)

クリスマス物語の羊飼ひたち、彼らの存在は、そのまことの羊、贖いの羊となられるイエス・キリストの生涯を指し示しているのではないだろうか。

クリスマスの知らせがどのような場所に知らされ、そしてどのような人々と共なる出来事だったか思いを向けさせられる。罪深く、光を理解できない世への降下、罪の贖い(救い)をもたらすための御子の来臨、それがクリスマスである。

(聖書教育より)

「神の栄光は、神に造られた人が尊厳を取り戻し、価値を見出され、大切にされるところで輝くからです。」(聖書の学び～飼ひ葉桶から始まる平和)